

うね内部分施肥

うね内部分施肥は畑作物に使う施肥方法の一つである。作物の根域範囲を限定して肥料を撒き、その範囲内の作土層全体に混入するという施肥方法である。うねを立てて栽培する畑作物の基肥に使われる。

うね内部分施肥のイメージは図 1 に示す。

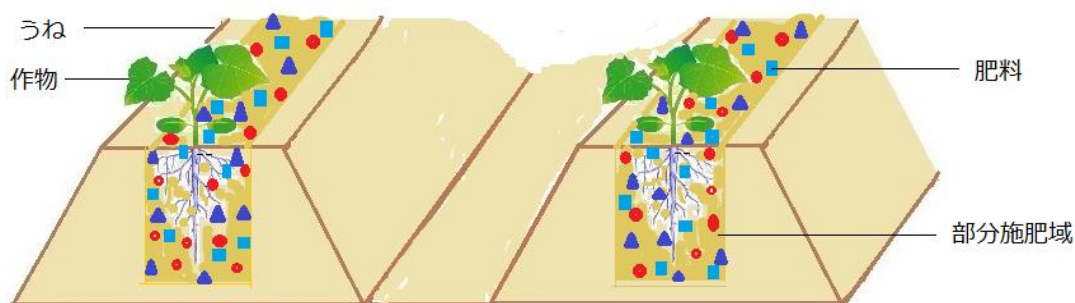


図 1. うね内部分施肥の模式図

1. うね内部分施肥の特徴

- ① うね立て作業に合わせて行うので、施肥作業が簡単で、施肥コストが低い。
- ② 作物根域範囲内の作土層全体に肥料がいきわたるので、根はどこからでも肥料を吸収でき、特に移植苗の根の周辺に肥料が存在して、定植直後の根はすぐに肥料を吸収することができ、初期生長を促す。
- ③ 接触施肥と局部施肥両方の利点を取り入れ、濃度障害を起こしにくい。
- ④ うねの側面とうね間に肥料を施用しないので、慣行の全面全層施肥に比べ、約 20～50% の施肥量が節減できる。特に根圏域の狭い作物に対して、肥料の利用率がさらに高く、無駄が少ない。
- ⑤ 機械施肥しかできず、うね立て施肥機械が必要で、応用範囲が狭い。

2. うね内部分施肥の機械と具体的な施肥方法

うね内部分施肥は、基肥の施用に使われる方法である。施肥機械はうね立て施肥機を使う。小麦やトウモロコシ、大豆のような畑作物は、うねで栽培する場合は、耕耘機にうね立てアタッチメントを取り付け、そのアタッチメントにさらに施肥装置を増設して、うねを成型するとともに肥料を施用して土と攪拌混和し、うね内に部分施肥域を作る。

生育期の短い葉菜類は、基本的にロータリーなどで土を耕起した後、うねを作る際にうね立て機に取り付けている施肥装置で施肥し、うね立てと同時にうね内の設定された域内の土壌に肥料を混合させてから播種か定植する。